『チッタ・イデアール』にみる B.アンマナーティの建築書の構想に関する考察

A STUDY ON B. AMMANNATI'S CONCEPTION OF TREATISE
ON ARCHITECTURE ANALYZING *CITTÀ IDEALE*

岩谷 洋子*

Yoko IWAYA

Città ideale is composed of the fragments of Ammannati's drawings for publishing a treatise on architecture.

Ammannati's treatise has many plans principally, and reflects considerable effects of Books of Serlio and those of Palladio. It takes on the character of a utility book with plural drawings corresponding to actual works, and creates the basis of various conceptions.

Ammannati regarded public architectures as important, and ideally designed all kinds of architectures of the city. In Ammannati's treatise, the perfection is pursued and represented on the level of architectures, constituent elements of the city.

Keywords: Italy, Renaissance, Mannerism, Ammannati, Ideal City, Treatise on Architecture

イタリア、ルネサンス、マニエリスム、アンマナーティ、理想都市、建築書

1. はじめに

現在、ウフィツィ美術館には、16世紀の建築家バルトロメオ・アンマナーティ (Bartolomeo Ammannati 1511-1592年) の建築に関する図面を集め、一冊の本として綴った『チッタ・イデアール: *Città ideale*』¹⁾ と題する図面集が保存されている。

「チッタ・イデアール」とは、理想都市という意味であるが、この図面集に収められた図面の完成度はさまざまで、作成年代も一定の時期に限られることはなく、そこには一貫した建築の理論体系もみられない。

したがって、これは本として綴られてはいても、そこにひとつの理想都市が表されているのではなく、フォッシンが指摘するとおり²⁾、その生涯にわたって描かれた数々の図面の寄せ集めから成る。アンマナーティ自らがその生涯において「理想都市」と題する建築書をまとめることはなかった。

しかし、生前にアンマナーティはやはり建築書を著そうと考えていたようで、その様子は同時代人のボルギーニの著述から知ることができる³⁾。ボルギーニは、さまざまな都市を移動する中で制作活動を行ったアンマナーティが、どのような都市でいかなる作品を制作したかについて、生年から亡くなるまで事柄を順序立てて記述しているのである⁴⁾。それが出版された1584年の時点では、アンマナー

ティは既に多くの図面を描きためていて、出版を待つのみという状態にあった。

現在ある図面集に、いつ誰が「チッタ・イデアール」というタイトルをつけたのかは明らかではないが、同じくウフィツィ美術館所蔵のジョヴァン・バッティスタ・ネッリ (Giovann Battista Nelli 1661-1725年) が模写したアンマナーティの図面集⁵⁾ みると、それに付された説明の文中に、「バルトロメオ・アンマナーティによる『チッタ・イデアール』のオリジナルから模写した…」⁶⁾ と、ネッリ自身の手によって記されている。それらの図面は、構成や内容にかぎらずデザインの点からみても、ネッリが現在の『チッタ・イデアール』に収められた図面の各々を模写したものであるのは明らかである⁷⁾。したがって、遅くとも18世紀前半には、アンマナーティの図面集はすでにまとめられ、『チッタ・イデアール』という題名で扱われていたことになる。

本論においては、この『チッタ・イデアール』をもとに、アンマナーティがいかなる建築書を構想していたのかを考察する。15世紀以来、ウィトルウィウスの『建築十書』の訳本や注釈本、建築家が執筆した刊行本など、さまざまな形で著され出版されてきた建築書のなかで、それはどのように位置づけられるのだろうか。

一方、フィレンツェのリッカルディアナ図書館に保存されてい

* 工博

Dr. Eng.

るアンマナーティのノート⁸⁾からは、数学や測量法などの建築家に必要とされるさまざまな知識の習得や、都市防備に関する実用面での研究の様子を窺うことができ、これも建築書を解明する手がかりとなるため、合わせて考察する。

2. 『チッタ・イデアレ』の成立と変遷

まずは、『チッタ・イデアレ』がいかにして成立し、どのような経緯で現在のようにまとめられたかを確認する。

アンマナーティが出版を意図していたのは、ボルギーニによると、数々の図面によって表される「完全な都市 (città perfetta)」を扱った建築書であった⁹⁾。ボルギーニは、アンマナーティが描いた多くの図面を自らが実際に手にして見たかのように述べている。そこには王宮や貴族の邸宅から、礼拝堂、店舗、広場にいたるまで、都市に備えられるべきあらゆる種類の建物が描かれていて、さらには、別荘や農家までが取り上げられていたといわれている。

結局、建築書は出版されるには至らず、そのために描かれた多くの図面は、アンマナーティが死後イエズス会に遺贈した財産のなかに含まれていたはずであったが¹⁰⁾、イエズス会はそれらを手放してしまった¹¹⁾。

こうして行方がわからなくなっていた数々の図面は、バルディヌッチ (Filippo Baldinucci 1624-1696 年) の時代には、再びその一部が発見されていた¹²⁾。バルディヌッチによると、分散してしまった多くの図面のうちの一部を、数学者ヴィンチェンツォ・ヴィヴィアーニがその価値を認めて買い求め、親友のルイジ・デル・リッコに贈呈し、本としてまとめられた¹³⁾。

したがって、バルディヌッチの著作が著された1688年以前には、イエズス会に遺贈されたアンマナーティの図面のうちの一部が再び集められ、本にまとめられていたことになる¹⁴⁾。

しかしその本は、後の18世紀後半になると、ルイジ・デル・リッコからさらにトスカーナ世嗣フェルディナンドの手に渡された後に、再び行方がわからなくなっていた¹⁵⁾。

ところが、先述したジョヴァン・バッティスタ・ネッリが描いたアンマナーティの図面の模写によって、遅くとも18世紀前半には、現在ある形の『チッタ・イデアレ』が存在していたことが認められる。またこれは、ルイジ・デル・リッコがヴィヴィアーニから譲り受け、フェルディナンドに贈呈した図面集と同一のものと考えてよいであろう。

以上のことから、ウフィツィ美術館所蔵の『チッタ・イデアレ』は、アンマナーティが建築書を著そうと意図して、生涯にわたって描きためてきた数多くの図面の残簡であるといえる。

実現されるには至らなかった建築書のための図面は、遺贈されたイエズス会の手から放れて後、その一部が再び買い求められ本として綴られた。これが現存する『チッタ・イデアレ』である。このことは、そこに都市におけるさまざまな種類の建物の図面が収められていて、ボルギーニによるアンマナーティの建築書についての記述と一致する点からも確かめられる。

3. 『チッタ・イデアレ』からみた建築書の構想

ここでは『チッタ・イデアレ』を手がかりとして、欠落した図面については不明である点、内容や完成度に関して一貫性がない点、さらには後に図面集としてまとめられる際に何らかの取捨選択が行われた可能性がある点などの問題を念頭に置き、アンマナーティが構想していた建築書について考察する。

まず、アンマナーティが建築書を著すには、描く建物のデザインばかりではなく、出版される本としての構成や内容、表現の方法についても構想をたてなければならぬであろう。それについては、既に出版された建築書や同時代の建築書を参考にしたことも考えられるため¹⁶⁾、他の建築書との対比も行い、『チッタ・イデアレ』からアンマナーティの建築書の構想を明らかにする。

3-1. 構成

『チッタ・イデアレ』は図面集としてまとめられたため、当然、図面やスケッチのみで構成されている。しかし、このことからまず、

図1 アンマナーティ、《チッタ・イデアレ》: Bartolomeo Ammannati, Fabbriche di sua invenzione. Città ideale, Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi.

アンマナーティが著そうとしていた建築書は、ボルギーニが記述したとおり、相当数の図版を含む構成であったことが分かる。

ルネサンス初期には、アルベルティ (Leon Battista Alberti 1407-72年) がラテン語で建築書を著し、その中では挿絵を用いずに合理的で科学的な都市について論じている¹⁷⁾。また、アルベルティと同時代に、フィラレーテ (Filarete: Antonio Averlino 1400c.-69年) が著した建築書は手書きのもので、理想都市を説明する文章の余白に図版が添付されている¹⁸⁾。少し後のジョルジョ・マルティニ (Francesco di Giorgio Martini 1439-1502年) の建築書も手稿の形で流布したもので¹⁹⁾、文章と図版、あるいは図版相互の割付に対する関心は窺われない。16世紀にはいると、それまで熱心に研究されてきたウィトルウィウスの建築書にも、その研究や解説には挿絵が用いられるようになり、セルリオ (Sebastiano Serlio 1475-1554年) やパッラーディオ (Andrea Palladio 1508-80年) の建築書²⁰⁾においては、図版が重要な役割を果たすようになっていた。

『チッタ・イデアレ』に収められた多くの図面から [表1]、アンマナーティもまた図版に重点を置いていたことが認められる。そのうちのほとんどが平面図であることから、そこでは特に平面図による表現が考えられていたといえる。それらの中で完成度の高い図面をみると、紙全体に対して図版が中央に配置されて同じような割合を占めていて、こうしたことからアンマナーティが図版の割付にも注意を払っていたことが認められる [図1-a, b, c]。図版には理論や解説は書き込まれておらず、文章が付されていた (あるいはそうされるはずであった) にしても、それは平面図と同じ紙に割付られていたのではなかったことが分かる。

また、パッラーディオが著した建築書においては、同じページに平面図と立面図が上下に対応するように配置され、セルリオの建築書においても、パッラーディオほど徹底していないにしても、やはり平面図と立面図は対応させて描かれている²¹⁾。これに対してアンマナーティは、紙の中央に平面図を配置しているため、そこに立面図を関係づけて配置する余裕はない。

さらに、[図2] のようにアルファベットの記号を付けて部屋名

などを説明する表記法についても、『チッタ・イデアレ』は、パッラーディオの建築書との類似性が認められる²²⁾。セルリオのもので平面図や立面図にも同様な記号は付けられてはいるが、平面図の記号は文章の中で説明されている²³⁾。アンマナーティの構想した建築書の構成は、やはりパッラーディオの建築書、なかでも特に、パッラーディオが自ら設計した住宅について説明する「第二書」における表現方法との共通性が高いといえる。また、多くの種類の建物について具体的なデザインを幾つも示す実用性という点では、それはセルリオの建築書にも共通している。

アンマナーティは1544年から1548年にかけて、短期間であるがバドヴァやヴィチエンツァに滞在していたため、パッラーディオから直接学ぶ機会があるとすれば、おそらくその時期においてであり、パッラーディオはローマで古代実測調査をした後、1546年にはヴィチエンツァに戻っていた²⁴⁾。また、セルリオとの交友関係は明らかではないが²⁵⁾、アンマナーティはヴェネツィアには1527-31年、および1541-42年の2度にわたって滞在していた。

一方、同時代の建築家では、ヴィニョーラ (Giacomo Barozzi da Vignola 1507-73年) もまた図版を中心とする建築書を著した²⁶⁾。

ヴィニョーラの建築書は古典的なオーダーに関する手引書であるから、各オーダーにおける全体と部分の比例関係を示すために専ら立面図が用いられているが、柱台や柱頭といった細部の比例数値が表され、アルファベットの記号を付して、立面図各部の名称が明確に図示されている。

アンマナーティがウィトルウィウスを参照しつつ、オーダーに関する説明を試みた可能性は否定できないとしても、残された多くの平面図からわかるように、その建築書は、オーダーの規則を導き出すことを主たる目的とするのではなく、何よりもまず、都市に必要な各々の建物が「みごとに」「デザインされている」²⁷⁾ 構成となるように考えられていた。

以上のことから、アンマナーティが意図していた建築書は、都市を構成する各種別の建築について、多くの平面図が紙全体に対する割付を考慮しながら示される構成であり、既に刊行された建築書と

表1 『チッタ・イデアレ』における建築種別および図面数

王宮	大公の館	邸宅	庶民住宅	教会堂	小聖堂	鐘楼	修道院等	施療院	擁護施設	学校
2	7	12	1	10	5	2	5	1	1	1
官庁	税関	監獄	市場	水車小屋	食料品貯蔵庫	家畜小屋	ヴィッラロッジア	農家/農地管理人の家		
3	2	2	1	2	2	1	20	3		

*注 数字は図面数。

邸宅、ヴィッラなどで同一建物の1,2階の図面は別々に数え、部分的なスケッチなどは数に入れていない。

a) 'Convento di frati': 「(托鉢) 修道院」
n. 3394A

b) 'Dogana': 「税関」 n. 3406A

◀ 図2 アンマナーティ、『チッタ・イデアレ』

: Bartolom.° Ammannati, Fabbriche di sua invenzione.
Città ideale, Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe
degli Uffizi.

しては、セルリオやパッラーディオの建築書に近い形のものであったといえる。アンマナーティは現実の仕事に対処できる実用書²⁸⁾としての性格を備えた建築書を構想した。そこでは、それぞれの建築について幾つかの具体的な例を図示することによって、多様性が追求されているのである。

3-2. 内容

3-2-1. 都市の全体像

前述したように、アンマナーティが構想した建築書には、都市において必要と思われるすべての建物が満たされ、かつそれらの建物が各々美しくデザインされた都市が扱われていた²⁹⁾。実際、『チッタ・イデアレ』には、都市におけるさまざまな建築の図面が収められている。ここでは建築書の内容に関して、アンマナーティがいかなる都市像を描き出そうとしたかについて考察する。

都市についてはまず、都市の全体的な形態やその立地が、どのように考えられていたかを把握しなければならない。

ここで、アンマナーティと親しかったヴァザーリと同名で、その甥であるジョルジョ・ヴァザーリ・イル・ジョーヴァネ (Giorgio Vasari il giovane: 1562-1625) がまとめた図面集³⁰⁾について言及しておく必要がある。それは『チッタ・イデアレ』と同じタイトルであり、かつ都市における多くの種類の建物の平面図が各々1枚ずつの紙に描かれていて、アンマナーティによるものときわめて類似性の高い構成である。その巻頭には、道路や広場を配置した幾何学的な都市の全体図 [図3] が掲げられている。

ヴァザーリ・イル・ジョーヴァネがこの図面集を構想するのに、アンマナーティから何らかの着想を得たとしても、現在アンマナーティ自身が描いた都市の全体図は残されていない。

しかし、アンマナーティが都市の全体的な形態を考えていなかったわけではなく、フィレンツェのリッカルディアナ図書館に所蔵されるそのノートを見ると、都市防備の観点から、大砲による攻撃に最もよく耐え得る形態から、それには六角形か八角形がよいと判断している³¹⁾。

では、そうした都市をいかなる場所に築くべきかという敷地の選択については、アンマナーティは必要条件として、衛生的であること、多産であること、堅固であること、快適であることの4つを挙げ³²⁾、かつ都市防備を考慮に入れると川辺が適切であると考えているが、城塞を構築するには、山地がよいか平地がよいかは一概には決められないとしている³³⁾。

こうした考えの多くは、アルベルティの建築書の中に認められる。アルベルティは、都市の立地条件は敵からの侵入を受けにくく快適であること、山地か平地かといった選択はそれぞれに利点と欠点をもつことなどを述べている³⁴⁾。城塞の形態としては〇型がよいとする以外は、アンマナーティはその考えをくんで、ほぼ同様な視点から考えているのである。

さらに、リッカルディアナ図書館所蔵のアンマナーティのノートからは、城塞建築についてはフランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ³⁵⁾や、サン・マリーノの建築書を参考に、現実的な築城法について考察していた様子が窺われる³⁶⁾。ジョルジョ・マルティーニの建築書によると、都市には人体に照応する理想的な形態と寸法が必要とされ³⁷⁾、都市の形態には城塞の構築に適合するように、三角形や正方形、五角形、八角形などの多角形が用いられるべ

きで、円は完全な図形であっても防備には適さないのである³⁸⁾。

都市の立地条件では多くの点でアルベルティの建築書を参考にしたが、アンマナーティがその形態については〇型がよいとしなかったのは、都市防備の観点から、ジョルジョ・マルティーニのように正多角形が適切で、円は幾何学的に完全な形であっても都市防備にはふさわしくない形態であると判断したためと考えられる。当時の16世紀当時における都市は、大砲による攻撃に耐えるような形態で、よりいっそう堅固に構築される必要があった。アンマナーティもまた食料の貯蔵までも配慮し³⁹⁾、都市防備に重点をおいていた。

3-2-2. 都市組織

都市組織とは、都市の中にその構成単位である建築を位置づけ関連づける道路や広場、水道などを指すが、アンマナーティがこれらをいかに捉えていたかを窺い知ることは難しい。

アンマナーティの『チッタ・イデアレ』との類似性が高く同じタイトルをもつ、先述したヴァザーリ・イル・ジョーヴァネの図面集にある都市の全体図においては、正八多角形の都市に道路や広場が割付けられている。しかしその図面集の中では、各種建築の都市全体の中での位置づけや、それらと道路や広場などの都市組織に対する関係は論じられておらず、そうして割付けを考えただけでは、組織的なまとまりをもつ都市が表現されているとはいえない。

アンマナーティが、ヴァザーリ・イル・ジョーヴァネと似たような図を描いていたとしても、やはりそれによって『チッタ・イデアレ』から都市組織に対する全体的な考え方を読みとることはできないのである。

都市組織は、アルベルティやフィラレーテが、理想的な政治や社会を表す合理的で理想的な人間のための都市建設の計画を考案した15世紀には、都市の重要な構成要素であった。特にフィラレーテは、円に内接する2つの正方形を45度回転させ、ずらして重ね合わせた形の幾何学的な理想都市「スフォルツィンダ (Sforzinda)」⁴⁰⁾を描き、都市の中央に設けた広場をはじめ、道路や水道などの都市組

図3 ジョルジョ・ヴァザーリ・イル・ジョーヴァネ:「都市の分割配置計画」
‘Scompartimento della città’: Città ideale del Cav^{ro} Giorgio Vasari inventa^{ta}, e disegnata l’anno 1598. Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi.

(出典: Giorgio Vasari il giovane, *La Città ideale: Piante di chiese [Palazzi e ville] di Toscana e d’Italia*, a cura di Virginia Stefanelli, Roma, Officina Edizioni, 1970)

織に関しても具体的に考案している。フィラレーテは、都市の立地や全体の形態について述べた後に、各市門や塔からその中心広場までのびる主要道路、中心広場から各市門の方まで引かれた水道、生活必需品を扱う市場のある広場や教区教会などについて言及している。特に、王宮や聖堂の他に、裁判所、市庁舎、監獄、税関などの公共建築を取り上げ、それぞれの配置を検討しつつデザインしている⁴¹⁾。フィラレーテは都市組織を、相互の関係を配慮して幾何学的な都市の中に位置づけると同時に、それらに幅や奥行きといった寸法や形態、内容を具体的に与えて、個々の建築レベルにおいても考察しデザインしているのである⁴²⁾。

このような「理想都市」と比較すると、都市組織というレベルでアンマナーティが考案していたことに関しては、『チッタ・イデアレ』の中のn. 3399A [図4]の平面図によって断片的に示されるのみである。

それは、各都市にある、生活必需品を扱う市場が配置されたほぼ正方形の広場である。各辺には、それらをまっすぐ外に向かって延長した直線道路が八方から繋がっている。この広場では、一辺が120ブラッチア(約72m)の広場の四辺を幅8mほどの店が囲んでいる。店ではパンやチーズ、果物といったが売られ、また公に開かれた広場の中心部にあるアーケードのある建物では、鶏肉やハム、ソーセージ、魚などが扱われている。ここでは、寸法や具体的な内容までが考案されている。

アンマナーティは、都市における各種別の建物をデザインする中で、都市組織に関しても、このように都市の構成単位のレベルで考察していた。

3-2-3. 都市における建築

都市の構成単位となる建築については、『チッタ・イデアレ』の中の図面に描かれている建物を種類別に分類すると[表1]のようになり、ボルギーニが「すべてがデザインされ描かれ」、「そこに欠けるものはなにもない」と述べるように、アンマナーティがいかに多くの種類の建築を偏りなく取りあげようと考えていたかが認められる⁴³⁾。

これによってまず、アンマナーティが構想した建築書では、特に都市における公共建築に関心が示されていることが、その特徴であるといえる。王宮や都市の支配階層の館であるパラッツォばかりではなく、公共建築としての「官邸」や「税関」、「監獄」、「市場」、「学校」、さらには公共に対して慈善的な役割を担う施療院や擁護施設、托鉢系の修道院などについても着目して考案されていた。

また、それは社会的な階級の点からみると、王宮や貴族の邸宅から、市民の住宅までの多様な階層の住居が提案されている。一方、公共対個人という視点においては、学校、病施療院、擁護施設のような共同体施設や、住宅やヴィッラなどの個人所有の建物も扱われている。さらに、そこでは都市に必要な建物ばかりではなく、ヴィッラや農家のように都市の周辺部の建物にも関心を払ってデザインされている⁴⁴⁾。

このように、アンマナーティはさまざまな都市の建築について、各々そのあるべき形態を自らのデザインによって与え、具体的に示そうとしているのである。

建築書の構成ばかりでなく、こうした方法もまた、セルリオやパラディオの建築書を参考にして着想が得られたものと考えられる。

両者とも古代建築の研究を重視した上で、パラディオは自らの設計による住宅やヴィッラの図を示し⁴⁵⁾、セルリオはその同時代の建築家であるブラマンテやラファエッロ、ベルツィーらが設計した建築のあるべき形態として取り上げているのである⁴⁶⁾。

アンマナーティもまた、ミケランジェロによるパラッツォ・ファルネーゼのように、実際に設計された建築を模写しているのは、これを理想的なパラッツォと捉えて取り上げようと考えていたためではなかろうか⁴⁷⁾。

以上のように、『チッタ・イデアレ』からは、アンマナーティが都市の全体的な様相や都市組織を考案した様子を読みとることはできないが、都市の構成単位となるレベルの建築については、当時の都市に必要なさまざまな種類の建築を、それぞれあるべき形にデザインしていたことが認められる。特に、税関や監獄、市場、施療院、学校といった各種の公共建築には注意が払われていた。

これによって、アンマナーティはその建築書に、都市の構成単位となる建築に関して、その種別に偏りなく列举し、各々を理想的な形態で描きだそうと構想していたといえる。アンマナーティがデザインした、このような数々の建築の図面を見て、先述したようにボルギーニは、そこに「完全な都市」⁴⁸⁾が表されていると述べたものと思われる。

アンマナーティが、都市に必要なあらゆる建築を理想的に描き備えることによって、「理想都市」を表現しようとして構想していたのであれば⁴⁹⁾、その全体像や都市組織に関しては不明であっても、それは15世紀にアルベルティやフィラレーテが考案した、理想的な政治と社会に対応する「理想都市」ではなく、16世紀の末にヴァザーリ・イル・ジョーヴァネが、自ら描いた都市建築の図面集をそう名づけたような意味での「理想都市」に共通性が高いものであろう。

図4 アンマナーティ：「生活必需品を扱う市場のある各都市の公共広場」
‘mercato pubblico e necesario ogni giorno in ciascheduna città’
Bartolom. Ammannati, Fabbriche di sua invenzione. Città ideale,
Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n. 3399A.

4. 結語

ウフィツィ美術館所蔵の『チッタ・イデアール』は、アンマナーティが建築書を著そうとして描きためた数多くの図面の残簡である。建築書は実現されるには至らなかったが、『チッタ・イデアール』をみると、それは都市における各種別の建築の平面図を中心とした構成であり、具体的な幾つかの例を自らデザインして図示する方法によるものであったことが分かる。また、現実の仕事に対処できる実用書としての性格を備えていて、そこにはセルリオやパッラーディオの建築書からの影響が強く反映されている。

アンマナーティが構想した建築書には、新たな理論体系を展開する斬新さは認められないものの、具体的な多くの事例を示して様々な発想の基盤を与えようとする多様性が求められている。

一方内容に関しては、『チッタ・イデアール』には、各種の公共建築や王宮、ヴィッラなどさまざまな種類の建築の図面が収められていることから、アンマナーティはその建築書に、当時の都市に必要とされる各種別の建築を、特に公共建築には注意払って取り上げ、それぞれをふさわしい形に描きだそうとしていたと考えられる。それは、15世紀における理想的な政治と社会を映し出す本来の「理想都市」を描いた建築書ではなく、むしろ、自らデザインした各種の都市建築の平面図に都市全体図を添えて「理想都市」とした、16世紀末における図面集との共通性が高い。

アンマナーティが考えた都市の全体像や都市組織全体を把握できる図面は残されていないが、その建築書には、都市に求められるあらゆる建築を扱い、それら各々を理想的にデザインしようとする構想が読みとれる。そこでは都市は、その構成単位である建築のレベルにおいて完全性が追究され、表されているのである。

注

- 1) 《Bartolom. * Ammannati. Fabbriche di sua invenzione. Città ideale》, Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n. 3382A-3464A.
刊行本としては、Fossi, Mazzino (a cura di), *La Città: Appunti per un trattato*, Roma, Officina Edizioni, 1970. にまとめられ、解説が付けられている。
- 2) Fossi, Mazzino, “Di un trattato di architettura di Bartolommeo Ammannati” *Rinascimento*, serie II vol. 4, Firenze, G. C. Sansoni Editore, 1964, pp. 93-101; idem, *Bartolomeo Ammannati architetto*, Napoli, Morano Editore, 1967, p. 13; idem, *La Città*, op. cit., p.11, pp. 22-26.
- 3) ローマやフィレンツェで、常にアンマナーティと密接な関係にあったヴァザーリは、その著作『美術家列伝』において、アンマナーティの生涯については詳述せず、それをボルギーニに任せた: Vasari, Giorgio, *Le vite de' più eccellenti pittori scultori ed architettori* (1568), a cura di Gaetano Milanesi (1^a ed. 1906), Firenze, G. C. Sansoni Editore, 1981, VII, p. 522.
ボルギーニは『休息邸』と題する著作の中で、美術家としてのアンマナーティの生涯にわたる仕事について記述している: Borghini, Raffaello, *Il Riposo* (Firenze, 1584), a cura di Mario Rosci, Milano, Edizioni Labor, 1967, pp. 590-595.
- 4) ボルギーニは事実を客観的に簡潔に羅列して記し、同時代人であるがために記述可能な経緯や詳細については明らかにすることはなかった。たとえば、アンマナーティは彫刻で、当時は大罪となった決闘 (duello) をしたフィレンツェの貴族マリオ・ナリをモデルに制作したと物議を醸し、それがもとでフィレンツェを去ることになった。ボルギーニは、これを「決闘 (duello)」したとはせずに、マリオ・ナリがフランチェスコ・ムージと「闘った (combattè)」という表現にとどめている。また、後代のバルディヌッチによっても伝えられているように、アンマナーティはアカデミア・デル・ディセーニョに対して抗議の手紙を送ったが、これもボルギーニには述べられていない。
- 5) 《Dis. d'Architettura di Bartol. Ammannati, copiati da G. B. Nelli》: Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n. 3740-3830, Firenze. この中のタイトルページには、“Raccolta di disegni d'Architettura di Bartolomeo Ammannati, Fiorentino copiati da me G. B. Nelli. (私 G. B. ネリにより写された、フィレンツェ人バ

ルトロメオ・アンマナーティの建築デザイン集)”とある。そこには『チッタ・イデアール』をはじめ、アンマナーティやその弟子によるその他の図面の模写がまとめられている。

- 6) “I seguenti disegni di color paonazzi sono copiati dalli originali della Città Ideale di Bartolommeo Ammannati. … (赤紫で着色した図面はバルトロメオ・アンマナーティのチッタ・イデアールのオリジナルから写したものである。…)”
ネリは『チッタ・イデアール』を模写するにあたって、平面図の壁厚や柱に赤紫の着色をした。同様に、その他のアンマナーティの図面の模写には赤色を、アンマナーティの弟子の図面には青色をつけ、着色により分類した。M. Fossi, *La Città*, op. cit., p. 15.
- 7) ネリは、『チッタ・イデアール』の中から、スケッチや完成度が低い図面などを排除して意図的に模写している。
- 8) Bartolomeo Ammannati, in 《Pacioli Luca, della proportione, ecc, Ven. 1509》: *Manoscritto Riccardiano*, Edizione Rare n. 120, Firenze, Biblioteca Riccardiana. ここには3冊のノートが、アンマナーティによる書き込みのある2巻のルカ・パチョーリの著作とともにまとめられている。
- 9) ボルギーニは、アンマナーティの彫刻や建築の仕事に関してひととおり述べた後、晩年には健康にすぐれなかったとして終わらせる前に、続いてこれから出版されるのを待つものとしてこの建築書を取り上げている: R. Borghini, *Il Riposo*, op. cit., pp. 594-5: 「彼 (アンマナーティ) がつくりあげた建築書はすばらしく、そこにおいて彼は、数々の図面から示される広々とした完全な都市を創造したが、それらの図面に描かれているのは、必要なものを完備した王宮や官邸、聖堂、組合貴族の邸宅や職人の住居、広場や道路、店舗や噴水、その他よく計画された都市に備えられているものである。さらに挙げていくならば、別荘として庭園を備えた王や貴族の館は求められる快適さを備えており、また、農家にはすべての必要なものと田舎の生活に求められるすばらしさが備えられている。こうして再度見直さなくとも、すべてがデザインされ描かれていて、出版するに欠くものは何もないのである。」
- 10) アンマナーティは老齢に至る頃からイエズス会と関わりを持つようになり、フィレンツェのイエズス会の聖堂やコッレージョの建立にあたっては、建築家としての役割を果たすにとどまらず、自らの財産を投入するなどして積極的に貢献していた: Pirri, Pietro, “L'architetto Bartolomeo Ammannati e i Gesuiti”, in *Archivum Historicum Societatis Iesu*, XII, Roma, 1943, pp. 5-57. 妻ラウラ・パッティフェッリに先立たれ子孫のないアンマナーティは、財産をイエズス会が相続するように取り計らっていた: Gaye, Giovanni, *Carteggio inedito d'artisti del secolo XIV, XV, XVI*, Tomo III (Firenze, 1840), Torino, Bottega d'Erasmo, 1968, pp. 554-5.
- 11) イエズス会が法王クレメンス 14 世から解散を命じられて、フィレンツェのサン・ジョヴァンニ・ノ聖堂およびコッレージョを、修道会スクオーレ・ピーエ会に明け渡すのは 1775 年のことである。したがって、アンマナーティが残した数々の図面は、イエズス会がサン・ジョヴァンニ・ノから退去する際に処分されたのではなく、1688 年のバルディヌッチの著作以前に、既に手放されていた。それらは Pirri がまとめた史料により Kiene が指摘したように、イエズス会からメディチ家のフェルディナンド一世に献呈された可能性も考えられる (ただし Kiene による編年的分析は、アンマナーティと同時代と、それより後の時代の 17 世紀から 20 世紀に至るまでの記述内容が等価に扱われている点、また『チッタ・イデアール』を模写した後述の Giovan Battista Nelli の図面集からの年代的な考察を欠いている点で受け入れがたい): P. Pirri, *ibidem*, p. 53 (docc. 16); Kiene, Michael, *Bartolomeo Ammannati*, Milano, Electa, 1995, pp. 194-5.
- 12) Baldinucci, Filippo, *Notizie de' professori del disegno da Cimabue in qua*, Firenze, 1688, vol. 2, p. 8.
- 13) バルディヌッチよりも 40 年ほど遡った時代に、バリオーネは、あるべきものすべてを備えた都市を扱った建築書をアンマナーティが著そうとしていたことを記しているが、死後に図面の行方がわからなくなったことについては述べていない: Baglione, Giovanni, *Le vite de' pittori scultori et architetti dal pontificato di Gregorio XIII fino a tutto quello d'Urbano VIII* (Roma, 1649), a cura di C. Gradara Pesci, Velletri, 1924, ristampata da Arnaldo Forni Editore (Bologna, 1986), p. 28.
- 14) バルディヌッチによると、アンマナーティの図面は 2 冊の本に綴じられたことになるが、現在ウフィツィ美術館に残されているのは 1 冊のみである。2 冊の本が、後になってさらに 1 冊に纏められたか、2 冊のうちの 1 冊は失われてしまったか、などさまざまな可能性が推測されているが、バルディヌッチがなぜそのような記述をしたかを解明する史料はない。
- 15) Milizia, Francesco, *Memorie degli architetti antichi e moderni*, Bassano, 1785, Tomo I, pp. 49-50. なお、ここでミリツィアが述べる「トスカナ世間フェルディナンド」とは、コジモ 3 世 (1642-1723 年) の息子フェルディナンド (1663-1713 年) を指す。

- 16) 特にセルリオの建築書に関しては、アンマナーティはその一冊を所持し、必要ときにそこから引用することもあった。M. Fossi, *Città ideale*, op. cit., p. 427.
- 17) アルベルティに関しては、Alberti, Leon Battista, *L'Architettura* (traduzione di Giovanni Orlandi), Milano, Edizioni il Polifilo, 1989; L. B. アルベルティ『建築書』(相川浩訳) 中央公論美術出版 1982 年
- 18) フィラレーテに関しては、Antonio Averlino detto il Filarete, *Trattato di architettura*, a cura di Anna Maria Finoli e Liliana Grassi, Milano, Edizioni il Polifilo, 1972, 2 voll.; Spencer, John R. (ed. by), *Filarete's Treatise on Architecture*, New Haven and London, Yale University Press, 1965, 2 vols.
- 19) Martini, Francesco di Giorgio, *Trattati di architettura ingegneria e arte militare*, a cura di Corrado Maltese, Milano, Edizioni il Polifilo, 1967, 2 voll.; Marani, Piero C. (a cura di), *Trattato di architettura di Francesco di Giorgio Martini: il codice Ashburnham 361 della Biblioteca Medicea Laurenziana di Firenze*, Firenze, Giunti Barbera, 1979.
- 20) バッラーディオの建築書は、Palladio, Andrea, *I Quattro libri dell'architettura* (Venezia, 1570), Milano, Ulrico Hoepli Editore, 1990; 桐敷真次郎『バラーディオ「建築四書」注解』中央公論美術出版 1987 年を参照。
セルリオの建築書については、Serlio, Sebastiano, *I sette libri dell'architettura* (Venezia, 1584), Bologna, Arnaldo Forni Editore, 1987, 2 voll.; Hart, Vaughan and Hicks, Peter (Translated by), *Sebastiano Serlio on Architecture: Books I-V of Tutte l'opere d'architettura et prospetiva by Sebastiano Serlio*, New Haven and London, Yale University Press, 1996. を参照。
- 21) A. Palladio, *I Quattro libri dell'architettura* (Venezia, 1570), *ibidem*, Libri II-IV; S. Serlio, *I sette libri dell'architettura* (Venezia, 1584), *ibidem*, Libro V.
- 22) A. Palladio, *I Quattro libri dell'architettura* (Venezia, 1570), op. cit., Libro II, Cap. IV, V, VII, XI.
- 23) S. Serlio, *I sette libri dell'architettura* (Venezia, 1584), op. cit., Libro III, vol. 1, p. 68, p. 70, p. 72, p. 88.
- 24) 福田晴彦『バラーディオ』鹿島出版会 1979 年の年表より。
- 25) セルリオは 1527 年のサッコ・ディ・ローマにより、ローマからヴェネツィアに逃れてきたが、1541 年にはフランスに移った。したがってアンマナーティがヴェネツィア滞在期にセルリオと直接知り合う機会は十分考えられる。
- 26) Vignola, Giacomo Barozzi da, "Regola delli cinque ordini d'architettura" (a cura di Maria Walcher Casotti), in *Trattato di architettura*, Milano, Edizioni il Polifilo, 1985, pp. 499-577; 長尾重武編『ヴィニョーラ 建築の五つのオーダー』中央公論美術出版 1984 年
- 27) F. Baldinucci, *Notizie de' professori del disegno ...*, (1688), op. cit., p. 8. パルディヌッチはボルギーニの記述と同様に、それが都市に必要な建物の全種別がデザインされみごとに描かれている建築書であったとしている。パルディヌッチは、アンマナーティがローマに移ってから古代建築の研究に励み、その結果として大いなる崇高な都市を表す建築書を著したとして、ローマでの仕事の成果に関しては、まず建築書について記述している。
- 28) ここでいう実用性とは、ヴィニョーラの建築書におけるような、一貫性のある体系的な秩序を構築し、あらゆる場合にそれが適用されるといった方法ではなく、むしろセルリオの建築書におけるように、多くの例を取りあげて、それぞれの場合に対応しようとする方法によるものである。
- 29) 注 5 参照。ボルギーニは、アンマナーティが制作した彫刻については、それに対する自己評価を場合によって bello (bellissimo) と付するのみで最小限に留め、その像が表す人物の名称や構成、材料を中心に説明している。刊行を待つ建築書についても同様に、ボルギーニはまず建物の種別を記そうとした。そのため、そこからアンマナーティがいかにより多くの種類の建物を描いていたかが窺われる。
- 30) ジョルジョ・ヴァザーリ・イル・ジョーヴァネ (Giorgio Vasari il giovane: 1562-1625 年) がまとめた図面集もまた「チッタ・イデアレ」と題するが、これはヴァザーリ・イル・ジョーヴァネ自らがつけた題名で、都市やその周辺部におけるさまざまな種類の建物の平面図からなるという構成や内容の点で、アンマナーティのものときわめて共通性が高い: 《Città ideale del Cav.^{re} Giorgio Vasari inventa.^{re}, e disegnata l'anno 1598》, Firenze, Gabinetto Disegni e Stampe degli Uffizi, n. 4529-4594; Giorgio Vasari il giovane, *La Città ideale: Pianta di chiese [Palazzi e ville] di Toscana e d'Italia*, a cura di Virginia Stefanelli, Roma, Officina Edizioni, 1970.
- 31) M. Fossi (a cura di), *La Città*, op. cit., 1970, p. 419.
- 32) M. Fossi (a cura di), *La Città*, *ibidem*, 1970, p. 423.
- 33) M. Fossi (a cura di), *La Città*, *ibidem*, 1970, p. 367.
- 34) L. B. Alberti, *L'Architettura*, op. cit., p. 147, p. 184 (IV-2, V-4).
- 35) M. Fossi (a cura di), *La Città*, *ibidem*, 1970, p. 364.
- 36) M. Fossi (a cura di), *La Città*, *ibidem*, 1970, p. 380.
- 37) Martini, Francesco di Giorgio, *Trattati di architettura ingegneria e arte militare*, op. cit., vol. 1, pp. 3-15, vol. 2, Tavv. 1-8.
- 38) Martini, Francesco di Giorgio, *Trattati*, *ibidem*, vol. 1, pp. 6-13, pp. 20-22, vol. 2, Tavv. 4-5, Tavv. 8-9.
- 39) M. Fossi (a cura di), *La Città*, op. cit., 1970, pp. 411-2.
- 40) Filarete, *Trattato di architettura*, op. cit., vol. I, p. 165., vol. 2, Tav. 23.
- 41) Filarete, *Trattato di architettura*, *ibidem*, vol. I, p. 273-295, vol. 2, Tavv. 47-51.
- 42) Filarete, *ibidem*, vol. I, p. 165 e segg., vol. 2, Tav. 23 e segg.
- 43) ただし、ボルギーニが「組合」(の建物)や「職人の住居」、「噴水」を取り上げているのに対し、それらは失われてしまったためか、『チッタ・イデアレ』には収められていない。逆にそこには、ボルギーニが言及していない「税関」や「監獄」などが含まれている。
- 44) 《Bartolom.^o Ammannati. Fabbriche di sua invenzione. Città ideale》, op. cit. のなかで、たとえば n. 3426A-3429A はヴィッラ、n. 3431A や n. 3458A は農地管理人の家(あるいは農家)。
- 45) A. Palladio, *I Quattro libri dell'architettura* (Venezia, 1570), op. cit., Libro II.
- 46) S. Serlio, *I sette libri dell'architettura* (Venezia, 1584) op. cit., vol. 1, pp. 64-9.
- 47) 《Bartolom.^o Ammannati. Fabbriche di sua invenzione. Città ideale》, op. cit., n. 3450A.
- 48) 注 9) 参照。
- 49) フォッシは、16 世紀のフィレンツェで前世紀の人文主義的な理想が現実によって実際に悉く否定され、メディチ家がトスカーナ大公国を支配する時代となってもなお、アンマナーティは「理想都市」という概念に密着し、その意味を追究していたとしている。フォッシによると、アンマナーティは市場や監獄、税関、施療院といった都市における公共性のある建築を描き出し、社会的・機能的な考察を与えて視覚化することによって、15 世紀の建築理論家や都市計画理論家の立場を、部分的にはあるが取り戻そうとしている: M. Fossi (a cura di), *La Città*, op. cit., 1970, pp. 27-30.

(2000年12月10日原稿受理, 2001年9月7日採用決定)